

## 第2章 史跡鹿兒島城跡の概要

### 第1節 鹿兒島県及び鹿兒島市の位置と自然環境

#### 1 沿革

鹿兒島の地名については、様々な説があるが、鹿兒島の名が文献等で確認されるのは「続日本紀」に天平宝字8年（764）12月に桜島の噴火記事において「麿島」（桜島の古称か）と記されたことが初見とされる。当時の鹿兒島市は一寒村であったが、今日のように発展した始まりは、文治元年（1185）に島津氏の始祖忠久が薩摩、大隅、日向の守護職に任ぜられ、以後歴応4年（1341）頃第5代貞久が現市街地北部の東福寺城（多賀山）を居城としたときからである。

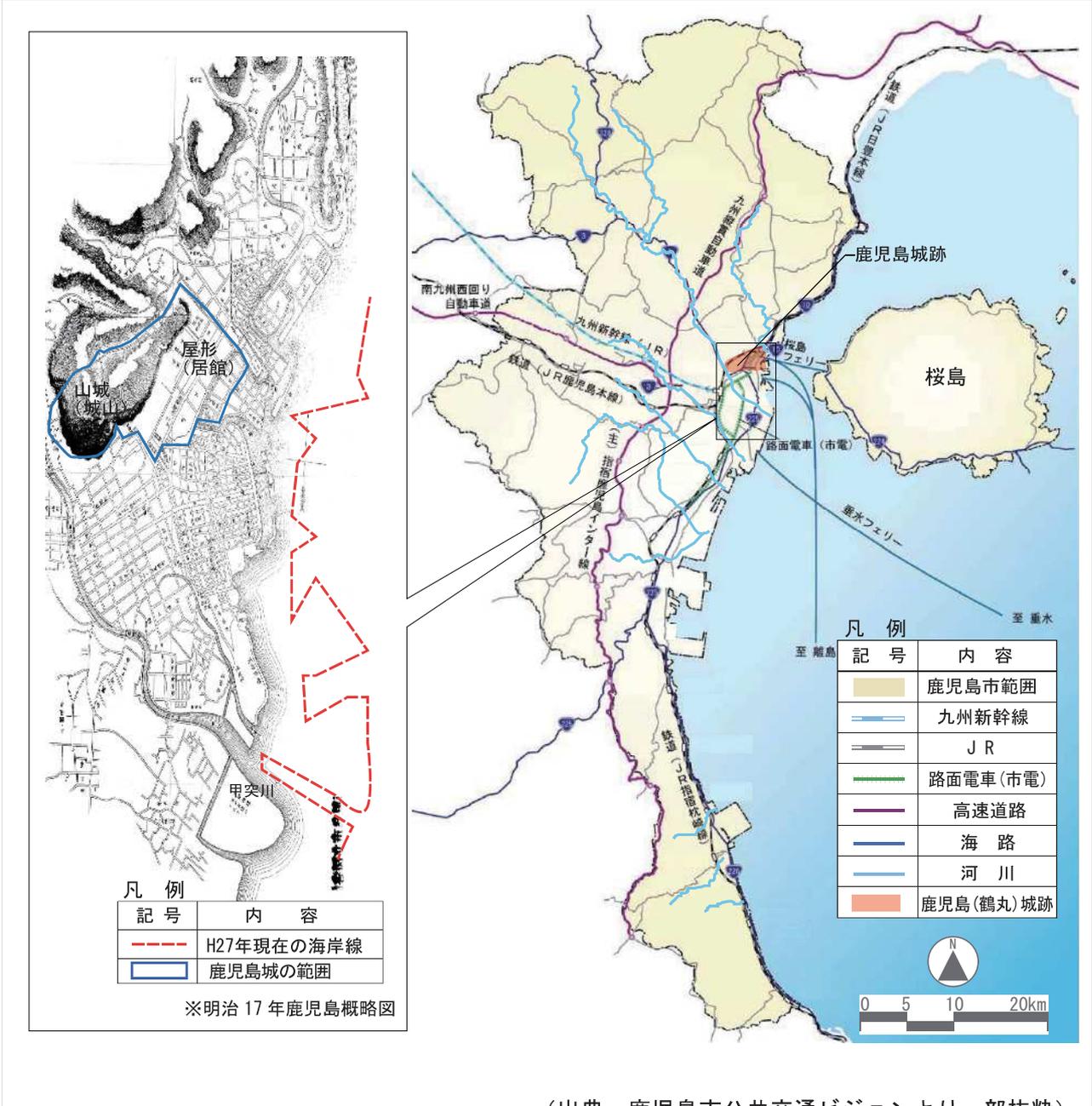
その後、清水城、内城と変遷が続き、慶長6年（1601）第18代家久（初代薩摩藩主）が鹿兒島城を構築、以来江戸時代を通じ第29代忠義までの267年間にわたり、居城となった。この鹿兒島城の築城の際、城下町も併せて整備され、これが現在の中心市街地の都市的起源となっている。

明治2年（1869）の版籍奉還後も、藩庁は鹿兒島城に置かれ、明治4年（1871）には廃藩置県により鹿兒島県が設けられた。鹿兒島市は、明治22年（1889）4月1日、全国31の市とともに市制を施行し発足した。昭和25年（1950）には伊敷、東桜島両村を合併、昭和42年（1967）には谷山市と合併し、新鹿兒島市が誕生した。平成16年（2004）11月1日には吉田町、桜島町、喜入町、松元町及び郡山町と合併し、人口約58.4万人、面積約550km<sup>2</sup>（令和6年（2024）7月現在）の南九州の中核都市として歴史的な一歩を踏み出した。

#### 2 位置

鹿兒島県は九州島の最南端に位置し、総面積は9,187km<sup>2</sup>で、2,643kmの長い海岸線を有し、18市21町4村で構成されている。最北端の長島町蜂の島から、最南端の与論町チヂ崎までは約600kmあり、島嶼数は1,256で全国3位、そのうち有人島嶼数は28と全国4位であり、火山及び隆起珊瑚礁によって形成された島々が弧状に連なっている。種子島、屋久島、奄美群島をはじめとする多くの島嶼は、本県総面積の約28%と大きな割合を占めている。

鹿兒島市は九州の南端鹿兒島県のほぼ中央部にあり、東経130°23′から130°43′、北緯31°43′から31°45′に位置し、北は始良市、西は日置市、南は指宿市等と接している。また、東は鹿兒島湾（錦江湾）に面し、海を隔てた桜島を含んだ東西約33km、南北約51kmの風光明媚な都市である。市街地は、鹿兒島湾（錦江湾）に流入している甲突川、永田川等の7つの中小河川により形成された小平野部にあり、その周辺は、海拔100mから300mの丘陵地帯（シラス台地）となっている。鹿兒島市のシンボル桜島（1,117m）は、市街地から約4kmの対岸にある活火山である。



(出典：鹿児島市公共交通ビジョンより一部抜粋)

図 2-1 明治17年（1884）頃と現在の鹿児島市街の比較図（出典：鹿児島（鶴丸）城跡保存活用計画）

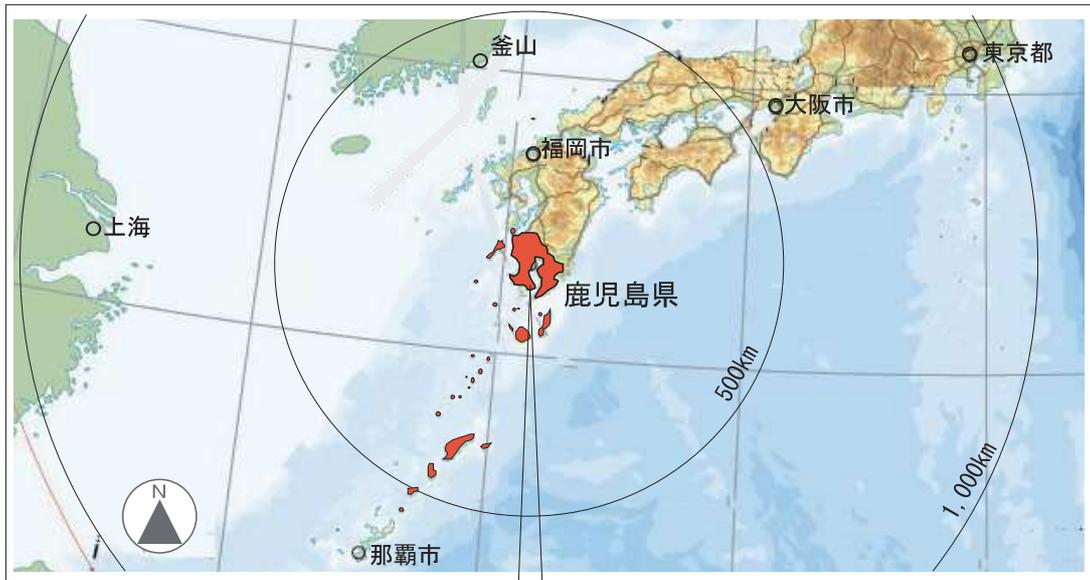


图 2-2 位置图（鹿兒島（鶴丸）城跡保存活用計画に一部修正）

### 3 自然環境

#### (1) 地形・地質

鹿児島県には、全国に111ある活火山のうち、11の活火山があり、本土の中央部を南北に縦断する霧島火山帯に、北部の霧島からトカラ列島まで活火山が分布している。また本県は、鬼界カルデラ、始良カルデラ、阿多カルデラ、宮崎県との境界をまたぐ加久藤カルデラの4つのカルデラを有しており、日本ジオパークにも認定されている。鹿児島湾（錦江湾）は、火山活動によってできた大きな地溝に海水が流入してできたもので、湾奥部に始良カルデラ、湾口部には阿多カルデラが存在する。始良カルデラ・阿多カルデラの大規模火山の噴出物である火砕流堆積物は、非溶結の凝灰岩と溶結凝灰岩として存在し、県内の各地域に分布する。

史跡鹿児島城跡が所在する鹿児島市は、桜島等の火山活動で噴き上げられた火山灰により、市街地を取り囲むように標高約100～200m前後のシラス台地が形成されている。これらのシラス台地は雨水による侵食に脆弱であるため、侵食谷が各地に見られ、鹿児島における台地地形の特色となっている。鹿児島市の構成は、北に伊敷や吉野、西に小野や西別府、南に坂之上の台地があり、その台地の間を稲荷川・甲突川・田上川・脇田川・永田川などの河川が東流し、海岸部に小デルタを形成している。なお、桜島は現在も活発に活動を続けており、風向きによっては火山灰が市街地に降る。

#### (2) 気候

鹿児島県は、気候区が温帯から亜熱帯に至り、全国の中でも平均気温が高く、温暖な気候に恵まれている。

鹿児島市の気温は平成29年（2017）から令和3年（2021）までの過去5年間の平均によると、夏季最高気温37.0度、冬季最低気温-1.3度であり、年間平均気温19.1度である。また、年間平均降水量は2,581mmに達し、令和3年（2021）に関しては、8月が最も多く、温暖で多雨の太平洋側気候を呈している。

活火山である桜島の爆発・噴火活動に伴う降灰等の影響もある。

年月	区分			平均湿度 (%)	降水量 (mm)	日照時間 (h)
	平均	最高	最低			
平成 29 年	18.6	36.0	-0.3	73	2,274.0	2,027.2
平成 30 年	19.0	36.3	-1.3	73	2,397.0	2,051.2
令和 元年	19.4	35.0	0.6	72	2,474.0	1,971.2
令和 2 年	19.2	37.0	1.0	73	2,977.5	2,041.4
令和 3 年	19.3	35.5	-0.6	73	2,782.0	2,038.6
5 年間平均	19.1	36.0	-0.1	73	2,580.9	2,025.9

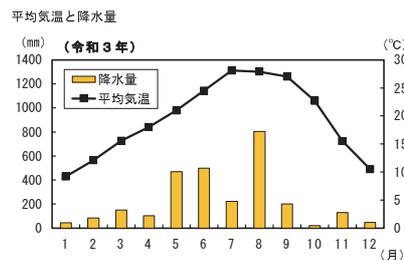
年月	爆発	噴火	地震
平成 29 年	81	406	7,295
平成 30 年	246	479	3,811
令和 元年	228	393	3,957
令和 2 年	221	432	2,258
令和 3 年	84	145	1,434

※資料 鹿児島地方気象台

年月	平均	最高	最低	平均湿度 (%)	降水量 (mm)	日照時間 (h)
令和3年1月	9.2	21.0	-0.6	68	45.5	157.0
令和3年2月	12.1	23.1	0.0	67	86.5	161.6
令和3年3月	15.6	24.9	4.6	72	151.5	172.6
令和3年4月	18.0	26.7	8.4	65	102.5	184.6
令和3年5月	21.0	30.0	10.0	80	470.0	127.0
令和3年6月	24.5	32.5	16.5	79	500.5	130.3
令和3年7月	28.1	35.4	22.7	77	222.5	166.7
令和3年8月	27.9	35.5	22.9	82	804.0	164.4
令和3年9月	27.0	33.4	20.9	77	200.0	192.5
令和3年10月	22.7	33.5	12.2	67	21.0	236.2
令和3年11月	15.5	25.5	6.8	70	130.0	169.2
令和3年12月	10.5	19.8	0.2	68	48.0	176.5

※資料 鹿児島地方気象台

※表中の記号について  
 (値) ……準正常値  
 統計を行う対象資料が許容範囲で欠けているが、一部の例外を除いて正常値（資料が欠けていない）と同等に扱う。



(出典：市政の概要)

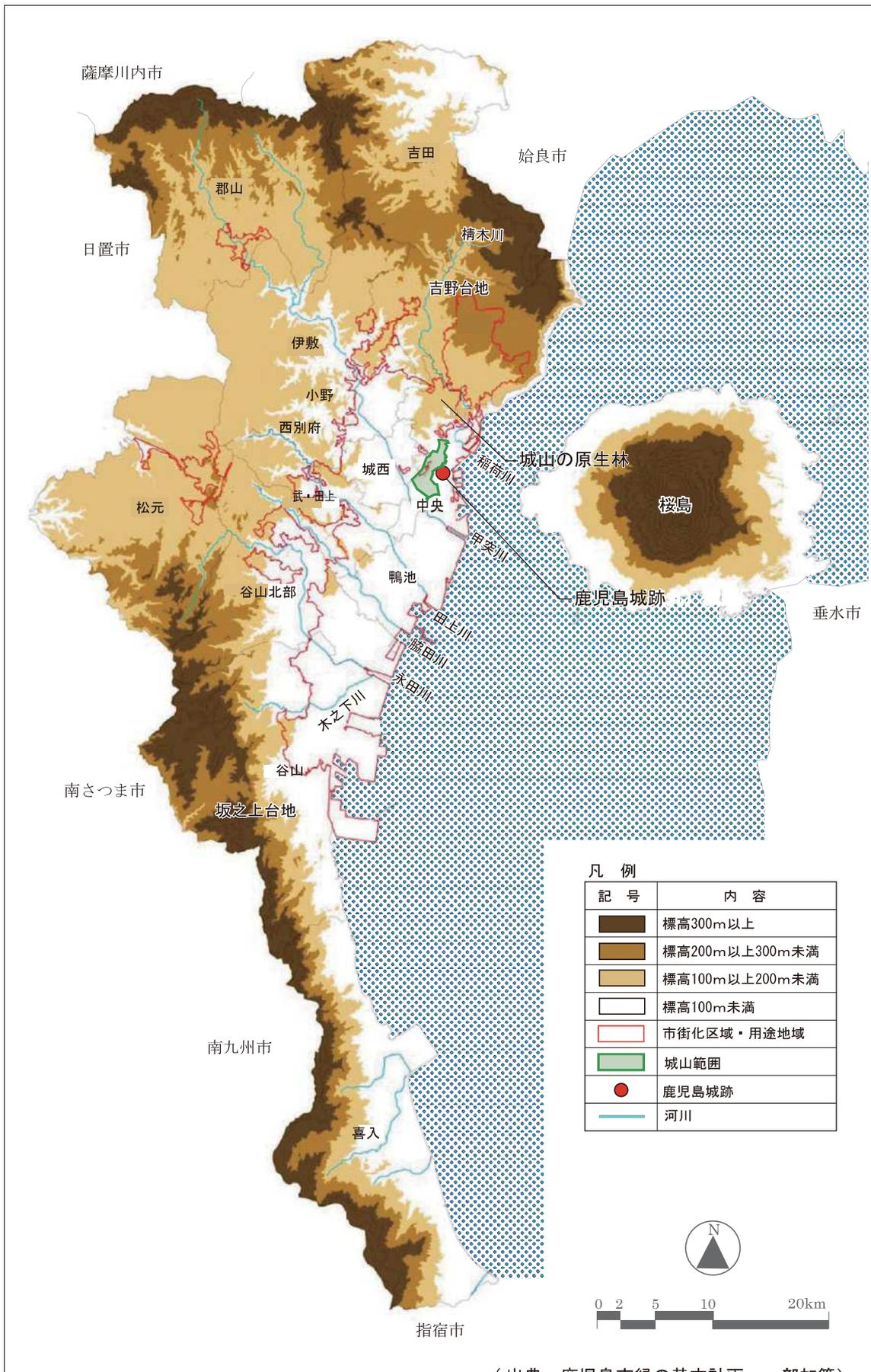


図2-3 鹿兒島市の地形（鹿兒島（鶴丸）城跡保存活用計画に一部修正）

### (3) 植生

鹿児島県のある九州島では照葉樹林帯（常緑広葉樹林帯）と落葉広葉樹林帯の境界は標高1,000mと言われ、標高が1,000m未満では潜在的には照葉樹が優占する森林が形成される。

鹿児島市の最高標高は桜島北岳の1,117mであり、次に高い地点は薩摩川内市に接する八重山の677mである。

桜島を除いた鹿児島市の植生は暖温帯の気候であるため、自然植生は河川や海岸の湿地部分を除いて照葉樹林となる。

人為的な攪乱が少ない自然林は、シイ林のミミズバイ-スダジイ群集とタブ林のムサシアブミ-タブノキ群集、イチイガシ林のルリミノキ-イチイガシ群集及びイスノキ-ウラジロガシ群集に代表される。ミミズバイ-スダジイ群集はミミズバイ、オガタマノキ、ヤマビワ、ツルコウジ、サカキカズラ、イヌガシなどを標徴種・区分種にする4層構造のシイ林である。海岸部から丘陵地の尾根や山頂など、やや乾燥した斜面に成立する。スダジイあるいはコジイが8m~20mある高木層・亜高木層に優占し、ヤマモモやヒメユズリハ、カゴノキ、クロガネモチ、イスノキ、アラカシ、タブノキなどが混在する。低木層にはヤブツバキ、ネズミモチ、タイミンタチバナなどの被度が高く、草本層にはコバノカナワラビ、ホソバカナワラビ、ハナミョウガ、サカキカズラ、テイカカズラなどの常在度が高い。

一方、タブ林のムサシアブミ-タブノキ群集は20m前後のタブノキが優占する群落で、低地部や河川沿い、丘陵の山脚部など湿潤で富栄養な立地に成立する。ムサシアブミ、ショウベンノキ、バクチノキ、モクダチバナなどが標徴種・区分種となる。高木層にはタブノキが優占するほかホルトノキ、アコウ、ヒメユズリハ、クロガネモチなどが混生し、低木層にはシロダモ、ハマビワ、ショウベンノキ、バクチノキなどの被度が高く、草本層にはフウトウカズラ、イシカグマ、フモトシダ、オオイワヒトデなどの常在度が高い。

ルリミノキ-イチイガシ群集は30mに達することもある高木層にイチイガシ、スダジイ、コジイ、ヤマモモ、アカガシ、タブノキなどが優占する群落で、標徴種・区分種をイチイガシ、ルリミノキ、サツマルリミノキ、シロバイ、カンザブrouノキとする。低木層にはシロバイやタイミンタチバナ、サツマルリミノキ、イズセンリョウなどの常在度が高く、草本層にはキジノオシダ、コバノカナワラビ、サツマイナモリ、ヒメアリドオシなどの常在度が高い。

イスノキ-ウラジロガシ群集はイスノキやウラジロガシ、アカガシ、スダジイ等が高木層に優占する群落で、標徴種・区分種をイスノキ、ハイノキ、シキミ、バリバリノキとする。鹿児島県では標高400m以上の丘陵地に出現し、草本層にはキジノオシダ、トウゴクシダ、ミヤマトベラ、カラタチバナ等の常在度が高い。

開発が進んだ鹿児島市内では自然林はほとんどなく、ミミズバイ-スダジイ群集が城山、磯、南部の丘陵地にわずかにある程度で、ムサシアブミ-タブノキ群集が磯、寺山、ルリミノキ-イチイガシ群集が花尾、寺山などに断片林として、イスノキ-ウラジロガシ群集が標高564mある烏帽子岳山頂付近にわずかにある程度である。

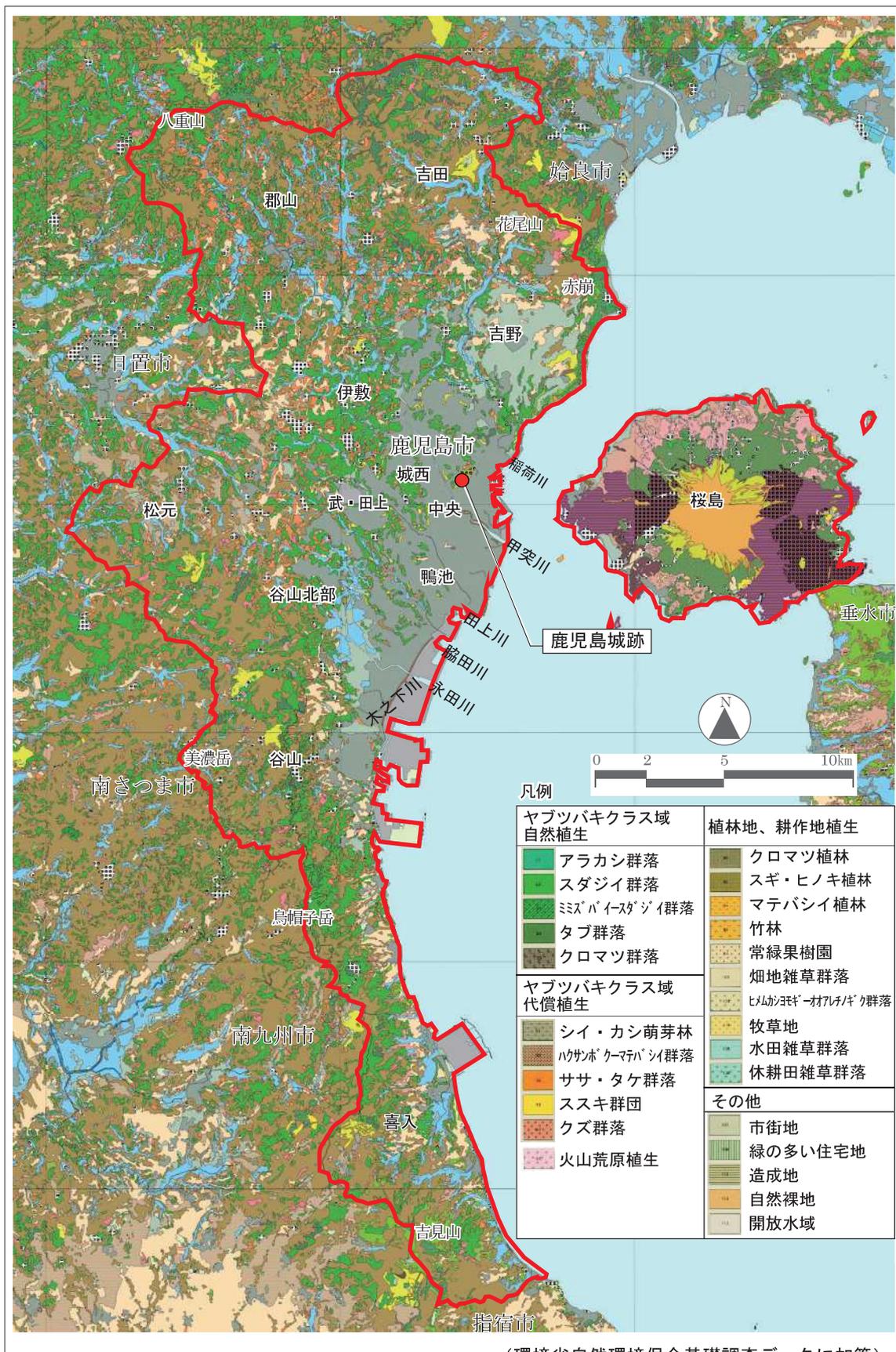
錦江湾沿いの50m未満の低平地は造成や干拓等によって開発され市街地となっている。特に中央部は著しく、150m未満の丘陵地の多くは造成されて住宅地となっている。周辺部になると農耕地も多くなり、河川沿いは水田となっている。近年は耕作が放棄されて、ヨシ群落やヒメガマ群落などのヨシクラスの植生になっているところもある。昭和30年代から50年代に耕作が放棄された棚田や段々畑にはスギの植林地が目立つ。

スギ植林地は里地周辺で、かつては薪採りや炭焼きのために利用されていた丘陵地にも精力的に植栽され広い面積を占める。丘陵地の中でスギ等が植林されなかったところにはひこばえが生長して、マテバシイ群落やシイ・カシ二次林、海岸部や湿潤な谷部では二次林であるヤブニッケイ・タブノキ群落となり、常緑広葉樹林の中で広い面積を占めている。

伐採あるいは造成、土砂崩壊によって改変が行われ、時間があまり経過していないところでは先駆性の落葉広葉樹群落のアカメガシワ-カラスザンショウ群落になっているところもあるが、面積は一般に狭小である。

鹿児島は竹林の面積が広く、特にモウソウチク林の面積が広がっている。モウソウチクは、鹿児島市磯にある仙巖園に元文元年（1736）に島津吉貴が琉球から取り寄せたものを植えたものが日本での発祥といわれており、鹿児島とつながりが深い。その後、各地に植えられ、食用や生活具の素材として不可欠のものであったが、戦後生活様式の変化により利用されなくなった。このため、地下茎をのぼし隣接する里山に侵入し分布を拡大している。特に吉田地域ではスギ林や二次林中に侵入し大規模な群落になっている。同様にマダケ林も拡大し、在来の自然を脅かす要因にもなっている。

また、戦後スギと同様盛んに植林されたクロマツはマツクイムシの被害によって枯死し、クロマツの植林地は消滅しているところが多い。



(環境省自然環境保全基礎調査データに加筆)

図 2-4 鹿児島市の緑被現況図 (天然記念物及び史跡城山保存活用計画に一部修正)

## 第2節 史跡周辺の社会環境

### 1 社会環境

#### (1) 公共交通

鹿児島市の交通は、鉄道・バス・市営電車等の公共交通手段に恵まれており、鉄道は、JR九州が鹿児島中央駅を起点に、鹿児島本線、日豊本線、指宿枕崎線方面への列車を運行している。さらに平成23年（2011）の九州新幹線全線開業に伴い、九州各県だけでなく、中国・関西地方からのアクセス性も向上した。また、鹿児島空港連絡バスや福岡・宮崎方面への長距離バス、県内各地に向けて運行されているバスは、いずれも起点が中心市街地に集中している。各方面とも運行本数も多く広域交通手段として利便性が高い。

鹿児島市中心市街地を起点・終点とした交通の主役は市電であるが、バス便も充実し、日常生活の利便性を高めている。この他、大型貨客船等が行き交う鹿児島港は、桜島や県内離島及び沖縄への商業港としての拠点性があり、物流面においても生産地と消費地が近接しているといった優位性を持つ。

#### (2) 観光資源

鹿児島市は雄大な桜島と波静かな鹿児島湾（錦江湾）に代表される自然景観や源泉豊富な温泉などを有し、都市と自然が共生する快適な環境に恵まれている。特に鹿児島市のシンボルである桜島は、現在もなお活発な活動を続けており、火山と人と自然のつながりを体感できるスポットとして人気がある（日本ジオパーク平成25年（2013）9月認定）。また、島津家の別邸である名勝仙巖園は、桜島及び錦江湾を借景にした壮大なスケールと美しさで有名であるが、隣接する重要文化財旧集成館機械工場などとともに世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の構成資産（旧集成館）の一部としても知られている。その他、縄文時代から近・現代に至る史跡等の歴史的な観光資源も多く残されている。

観光客数に関しては、令和5年（2023）の鹿児島市観光統計によると900万9千人で前年比25.5%増（令和元年（2019）比10.0%減）と大幅に回復した。また、宿泊観光客数は377万9千人で前年比27.8%増（令和元年（2019）比3.6%減）と概ねコロナ前の水準まで回復してきた。そのうち外国人宿泊観光客数は、21万7千人で前年比870.9%増（令和元年（2019）比56.0%減）となり大幅に増加したが、国全体に比べ回復に遅れがみられた。



写真2-1 城山展望台より桜島と錦江湾



写真2-2 仙巖園（鹿児島市提供）



写真 2-3 旧集成館機械工場



写真 2-4 豊富な源泉



(出典：鹿児島市公共交通ビジョン 一部抜粋)

図 2-5 鹿児島市内の交通網 (出典：鹿児島(鶴丸)城跡保存活用計画)

### (3) 土地利用

鹿児島市域面積の約70%は、都市計画法に基づく都市計画区域に指定されている。市街化区域は全市域面積の15.4%、市街化調整区域は37.6%である。

さらに市街地における火災の危険を防除するため定められる防火地域や、用途地域内において市街地の環境を維持し土地利用の増進を図るため建築物の高さの最高限度あるいは最低限度を定める高度地区、並びに崩壊の危険がある急傾斜地において崩壊することにより多数の居住者等に危害が発生することが予測される土地及び隣接する土地のうち、急傾斜地の崩壊による災害防止に関する法律に基づいて指定される急傾斜地崩壊危険区域や、宅地造成に伴う崖崩れや土砂の流出によって被害を防ぐことを目的とした宅地造成規制区域等も定められている。

史跡鹿児島城跡及び周辺についても、上記の対象に含まれていることが図 1-7～9 で確認できる。